

令和3年度事業予算について

本年度はコロナ対策として、例年4月開催の花園会総会を6月に変更しました。その為、一部の予算については議決を経ずに、緊急的に前年度繰越金を使って執行させて頂いております。

(4月末納期限の本山賦課金等、5月末納期限の教区花園会費等の助成金)

何卒、ご理解の程お願いいたします。

また本年度の修繕事業として、入口スロープの水銀灯交換、及び境内二カ所の夜間照明の撤去と参道足元灯の新

設を提案させて頂きます。

入口の水銀灯、及び境内の夜間照明は随分前から故障していますが、これまでは大晦日ぐらいしか必要がなく、そのままでした。しかし、国の法律改正で水銀灯の生産輸入が禁止され、また今後お通夜での利用に対応する為に、水銀灯はLED照明に交換、仮設だった照明は撤去し、石段や参道の足下を照らす照明を新設したいと思い、その為の予算八十万円を計上しています。宜しくご審議の程、お願い致します。



實相寺 花園会報

令和三年

五月一日発行

発行所

臨濟宗妙心寺派

陽明山 實相寺

實相寺花園会

〒761-0450

高松市三谷町

1811番地1

TEL087-889-3838

編集発行人

山本文匡

<https://www.jissouji.net>

第145号

お寺の掲示板

いしばいがん
石田梅岩は江戸時代の心学者で、町民階級の教育に尽力し、石門心学と呼ばれる一派の祖となつた人です。

さて端午の節句というと、子や孫の成長を祝う様々な行事が行われますが、振り返れば私達自身もかつては子であり、孫でありました。我が両親や祖父母がどのような思いで自分を育ててくれたのか、今更ながら思い知らされます。

子に迷う

親の心を

見るにつけ

我が父母も

かくとしらるる

石田梅岩

お釈迦さまの伝記・仏伝について⑤
 前回、菩提樹の下で悟りを開いたお釈迦様に、二人の商人が食べ物をお供養した話をご紹介しましたが、この時、お釈迦様がこの二人に教えを説いたかと言え、そうではありません。

そもそもお釈迦様は自らの心の悩みを解決するために出家し、修行した訳です。この時点では、自分が悟った内容を世の人々に説こうなどとは全く思っていないで、むしろ「私の悟った法は、普通の人には理解したい。法を説くことは私にとって疲労であり害である」とさえ考えていたようです。ですのでこの時点のお釈迦様は、寿命が来るまで悟りの喜びを味わって、寿命が尽きたら二度と輪廻しない涅槃に入ろうと考えていました。

ところが、その様子を天上から見ていた梵天という神様は、お釈迦様の悟った教えが世の中に広まれば、多くの人が救われるのに、それが世に出ないままお釈迦様が涅槃に入れば世間は滅んでしまう、と嘆きます。そして天界から降りてきて、お釈迦様をお願いします。「世尊よ、法を説き示したまえ。智慧の眼で、悩める衆生を見て、法を説きたまえ」と。

そこでお釈迦様がその智慧の眼でご覧になると、確かに世の中には悩みを抱えて苦しむ人々が大勢いることを知ります。しかしながら、そうした人々に自分が悟った教えを説いても理解されないだろうと断ります。しかし梵天は二度、三度と重ねて懇願し、ついにお釈迦様も人々に教えを説くことを承

諾します。このエピソードが有名な「梵天勧請」です。

このお話が重要なのは、ここでお釈迦様に教えを説いてくれるよう頼んだのが梵天であるという点です。梵天とはインドの言葉で「ブラフマン」といいますが、バラモン教（ヒンズー教）の最高神です。そのバラモン教の最高神が、お釈迦様に頭を下げてお願いしたということは、梵天にはお釈迦様のように人々を救う力がないことを意味します。勿論、このお話は仏教側の人間の創作でしょうが、ここに仏教はバラモン教の最高権威に従わない、バラモン教を超える宗教であるという意味合いが含まれています。

それともう一つ重要なのは、最初の回で説明したように、仏伝は時代と共

に変遷し、様々なバリエーションがあります。ここで梵天に頼まれて人々を救うことを決意したというお話は、お釈迦様が過去に仏と出会い、人々を救うために何度も生まれ変わりを繰り返し、最後の一生で悟りを得て仏陀となったというお話と矛盾します。

どちらが正しい？という話ではありませんが、この二つの話のどちらを支持するかで、その人の仏教観が現れます。我々とは全く異なる超人的な存在のお釈迦様を崇めるのか、それとも私達と何ら変わらない、様々な人生の悩みの中、修行して悟りを開いた一人の人間としてお釈迦様を崇めるのか、ということでしょう。

